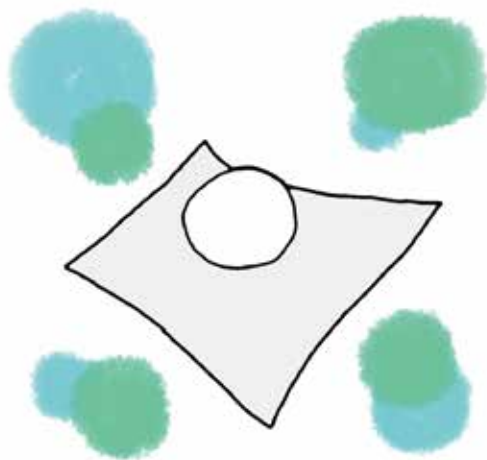


やさしい日本語で読む日本文学

レベル 初中級

# あめ 飴だま



【原作】げんさく 新美南吉

【簡約】かんやく 鈴木茅優

【挿絵】さしえ 菊地優花

季節きせつは春はるでした。とてもあたたかい日ひでした。

二人ふたりの子供こどもと、そのお母かあさんがいまし

た。三人さんにんは舟ふねに乗りのました。

舟ふねが出でようとなりました。すると、男おとこの

声こえが聞きこえました。

「まっつてくれえ！」

男おとこは、さむらいでした。



さむらいは、舟ふねにの乗りました。

さむらいは、舟ふねの真ま中なかに座すわりました。そ

してさむらいは、あたたかいのでいねむりを  
しました。

強つよそうなさむらいが、いねむりをしていま  
す。

子供こどもたちは、見みて笑わらいました。

「ふふふ。」



お母<sup>かあ</sup>さんは、さむらいが怒<sup>おこ</sup>ると思<sup>おも</sup>いました。

お母<sup>かあ</sup>さんは、子供<sup>こども</sup>たちに言<sup>い</sup>いました。

「しずかにしなさい。」

すると、子供<sup>こども</sup>が言<sup>い</sup>いました。

「お母<sup>かあ</sup>さん、飴<sup>あめ</sup>だまが、ほしいよ！」

もう一人<sup>ひとり</sup>の子供<sup>こども</sup>も言<sup>い</sup>いました。

お母<sup>かあ</sup>さんは、飴<sup>あめ</sup>だまが入<sup>はい</sup>った袋<sup>ふくろ</sup>を出<sup>だ</sup>しました。

飴<sup>あめ</sup>だまは一つ<sup>ひとつ</sup>でした。

「餡だまがほしいよ！」  
あめ

「餡だまがほしいよ！」  
あめ

お母さんは、困りました。  
かあ こま



お母<sup>かあ</sup>さんは、言<sup>い</sup>いました。

「あとで飴<sup>あめ</sup>だまを買<sup>か</sup>うよ。今<sup>いま</sup>は、がまんしてね。」

子<sup>こども</sup>供<sup>ども</sup>たちは言<sup>い</sup>いました。

「飴<sup>あめ</sup>だまがほしいよ。」

「飴<sup>あめ</sup>だまが食<sup>た</sup>べたいよ。」

その声<sup>こえ</sup>を聞<sup>き</sup>いて、さむらいは目<sup>め</sup>を覚<sup>さ</sup>めました。

お母<sup>かあ</sup>さんは、さむらいに怒<sup>おこ</sup>られると思<sup>おも</sup>いました。

すると、さむらいは言いました。

「飴だまを出せ。」

お母さんは、さむらいに飴だまをわたしました。

さむらいは、飴だまを舟のへりに乗せました。

そして、刀で飴だまを切りました。

飴だまは二つになりました。

さむらいは、子供たちに飴だまをわたしました。

それから、また、眠りました。



やさしい日本語で読む日本文学  
『飴だま』『伊勢物語』

2022年3月1日発行

発行 宮城学院女子大学 学芸学部 日本文学科

印刷 株式会社 フロット

許可なしに転載・複製することを禁じます。